信濃毎日新聞
2010年（平成22年）12月4日　（土曜日）　25面

オピニオン opinion

「本と図書館の未来を語ろう」をテーマに、11月27日、小布施町で開いた地域討論会「Wa（輪・話・和）の会」の様子を2週にわたって紹介します。今回は、町立図書館「まちとしょテラソ」で開いたシンポジウムの論議を。今年は「電子書籍元年」と言われていますが、電子化が進むと本と図書館はどうなるのかー。参加した約60人の〝本好き〟が意見を交わしました。

デジタル時代 あなたの読書は？ その5

「Waの会」小布施の討論会から（上）

国立情報学研究所連想情報学研究開発センター
中村 佳史さん（東京都）

「まちとしょテラソ」の開館前から準備に携わってきました。私たちが研究し、この図書館にも設置されている連想検索システムは、新書について検索すると、関連する情報が大学図書館、博物館などさまざまなデータベースから出てくるシステムです。文化を支えているものをつなげて、新しい発想や文化を生むのに適したシステムだと思って研究しています。

まちとしょテラソで取り組む、小布施町の文化や街並みのデジタルアーカイブ化にも参加しています。例えば、小布施の豪商高井鴻山（1806～83）が収集した和とじ本「鴻山文庫」などです。電子化が進めば、江戸時代のものがiPad（アイパッド）などで誰でも簡単に見られる時代がすぐそこに来ています。

ただ、そういった文化的資産のデジタルアーカイブ化は始まったところで、コンテンツが充実しているわけではありません。私たちは、そのお手伝いをしています。

コンテンツの充実図る

龍鳳（りゅうほう）書房社長
酒井 春人さん（長野）

私の次の世代になったら、今の状態では仕事が続けられないだろうと考えていたところ、若手社員からiPadの話を聞き、電子書籍の世界に関わりました。今は毎日、iPadを勉強や楽しみに使っており、奥が深い。（インターネット上で文学作品などを無料公開している）青空文庫で、若い時に読んだ本を再読すると感慨がよみがり、文字も拡大できて便利です。9月には初めて既刊を電子版で出しましたが、まだ採算ベースには乗りません。

電子書籍にかかわってから、これまで出版社側は、商売になるということだけで（本を）安易に作ってきたのではないかと感じました。本とは何かの原点に返らざるを得ません。本はどうあるべきか、まず皆でそのことを考え、著作権も含めいろいろな制度の整備を進める必要があります。ルール作りを急がないと、違法なコピーが出回り、出版社も書店も図書館も困ることになってしまいます。

本を守るルールが必要

小布施町立図書館まちとしょテラソ館長
花井裕一郎さん（小布施）

「まちとしょテラソ」は計画段階から町民と一緒につくった図書館で、イベントも町民と職員による運営プロジェクトで議論しながら決めています。建ててからが大事だと訴えてきた図書館です。なぜなら、人や情報が集まる「場」をつくりたいと思っているからです。

一時期、図書館が「無料貸本屋になっている」とメディアに批判されたことがありました。自分が図書館に関わるようになってから、そう言われたくありません。ぜひ皆さんにも図書館法を読んでほしい。おそらく、考えているより大きな使命が図書館には与えられています。そこに理念をプラスして運営していく結果が、「場」づくりだと思っています。

今、小布施の人々を紹介する電子書籍「小布施人百選」をまとめています。図書館で電子書籍を作れるというのはすごいことで、今後もこうした取り組みを続けていきたいと考えています。

図書館 人が集まる場に

シンポジウムではまず、中村さんが「電子書籍とは何か」について問題提起。米国を中心に普及しているアマゾンの電子書籍端末「キンドル」を紹介した上で、「紙の本をデジタルにしたものだけが電子書籍ではない」と指摘。さまざまな化学元素を立体的な画像で表示する内容でヒットしたiPadのアプリケーションを例に、「これも立派な電子書籍。紙の本ではできなかった表現方法を実現した好例です」と説明しました。

一方で、インターネットに接続でき、さまざまな情報を瞬時に引き出せる電子書籍は、本の魅力の一つである「想像する楽しさ」を奪うのでは―という議論も。酒井さんは「行間を読むという言葉の通り、100人が読めば100通りの世界ができるのが本。そこに動画や音楽が入れば、イメージは限定されるでしょう」と指摘。その上で「今は、生まれた時からテレビや携帯が当たり前の世界で生きている人が増えている。そんな世代ならではの発想も生まれるのでは」と期待を寄せました。花井さんは「知りたいという欲求が、次へ次へと情報を求めていくことにつながる面もあるのではないか」。これに対し中村さんは「検索すれば答えらしきものが出てくるネット。そこから着想が生まれ、さらに調べるという行動になるかは、利用する側の姿勢にかかっている。今の若い世代にそういう力が育っているかは疑問」と辛口なコメント。

そもそも「本の役割とは何か」という議論も。酒井さんは「出会いから人生を変えることもあるのが本で、電子書籍になってもそこは変わらない。紙であっても、電子であっても、質の高いコンテンツを提供していくことが欠かせないのでは」と指摘しました。

出会いが人生変えることも

シンポ前半「本について」

図書館の一角で「本と図書館の未来を語ろう」をテーマに行った「Waの会」のシンポジウム＝小布施町立図書館「まちとしょテラソ」

輪話和 Waの会

後半は、本の電子化が進むと図書館はどうなるか、参加者を交えて話し合いました。

まず電子書籍の貸し出しに興味があるか尋ねたところ、「図書館には古い本しかないと言われることもあり、電子書籍を導入するメリットはある」（長野市の女性）、「年間の新刊本のうち図書館で買えるのは1割弱なので、買えない分を補うため、新しい情報端末を利用しなければいけない」（伊那市立伊那図書館、平賀研也館長）と、図書館関係者から肯定的な意見が相次ぎました。

日本の出版物を集める国会図書館で電子化が進めば、他の図書館の本を貸し出す機能は不要になるという見方もあります。これに対し花井さんは、「図書館の役割やサービスは本だけではない」と指摘。情報格差をなくすために新しい道具をそろえるほか、後に学ぶ人たちのために、紙の本から電子書籍へ変わる課程を残し、今ある本を保存していきたいと話しました。

自由に活用 文化の下支えに

アンケートから

Waの会に参加した人に、電子書籍を読む端末をいくらぐらいなら手に入れたいですか？　とアンケートで聞いてみました。

▽2万円以下　端末そのものの価格でなく、コンテンツの流通方法がどうなるか（雑誌記事のばら売りなど）で、購入するかどうかを決めると思います。（女性・50代）

▽1万円くらい　コンテンツには利用料と著作権料が含まれる方がいい。携帯電話を持とうと思っていないアナログな私には、ただ便利という考えで進んでいる今の時代は好きになれません。（女性・40代）

では、図書館にどうあってほしいか―。酒井さんは「20年、30年後には、いろんな形で集まる場としての機能が強くなるのではないか」と予測。参加者の一人、東京都内の男子学生は、イギリス留学時に通った地方の図書館で、合唱の集まりや勉強会など、ネットでは探しにくい情報を見つけて利用した経験を紹介。「特に地方の図書館は、地域の情報が集まるいろいろな場として、使える気がしている」と提案しました。

これを受けて花井さんは、「僕たちの図書館は場づくりに一生懸命取り組み、いろんなことを仕掛けている。それを地域が『必要なこと』として認めていく、というのが大事」と注文。最後に中村さんが「図書館が自由に場づくりしていくことが、文化の下支えとして良い効果を生む。私もそれを支えていきたい」と締めくくりました。